

# ケン・ウィルバーの著書『セックス、エコロジー、スピリチュアリティ：進化の精神』（シャンバラ、1995年）の概要。

© 2025.03.14

ロジャー・ウォルシュ著『進化の精神』

ケン・ウィルバーの著書『セックス、エコロジー、スピリチュアリティ：進化の精神』（シャンバラ、1995年）の概要。

ロジャー・ウォルシュ（医学博士）は、カリフォルニア大学アーバイン校医学部精神医学・人間行動学科の精神医学、哲学、人類学の教授です。

科学分野は、豊富な知識の不足に悩まされてきた。データが蓄積され、分野が細分化されるにつれて、包括的な統合の探求は、より魅力的であると同時により絶望的に思える。心理学を例にとってみよう。19世紀末にささやかに始まった心理学は、今や競合する学派や療法の喧騒へと爆発的に成長した。統合の必要性をめぐる叫びや嘆きは、ますます混乱を招いている。したがって、1977年に登場した『意識のスペクトル』は、まさにそのような統合を提示しているように思われ、心理学者として正式な教育を受けていない若く無名の著者ケン・ウィルバーによって書かれたにもかかわらず、大いに興奮して迎えられたことは驚くには当たらない。確かに、『スペクトル』は、西洋心理学だけでなく東洋心理学も統合した点で、ある意味では期待以上の成果をあげた。

ウィルバーは、すぐに『アートマン プロジェクト』など、同様に包括的な他の著書を出版しました。この本でウィルバーは、やはり東西両方の多様な発達理論を統合し、幼児期から正常な成人期、そしてさまざまな思想分野によって説明される「正常を超えた」慣習後の段階までの発達をたどる統一的な見解を作り上げました。『エデンから上へ』では、発達モデルをフレームワークとして使用して、人間の認知と意識の進化をマッピングしようとした。その後すぐに、社会学、宗教、哲学、物理学に関する他の著作が続きました。1987年までに、ウィルバーは稀有な範囲と統合力を持つ学際的なコレクションを作成しました。

その後、5年以上もの間、悲痛な沈黙が続きました。ウィルバーにとって、この数年間は、決して平穏な日々ではありませんでした。結婚から10日後、妻トレヤが乳がんにかかっていることがわかり、その後の5年間は、トレヤの病気と闘い、そしてついには亡くなりました。さらに2年間は、妻の死を悼み、トレヤの生と死を記録した感動的な本「Grace and Grit」の執筆に費やされました。そして今、ウィルバーは、これまでで最大の大作であり、彼自身が「成熟した最初の作品」と表現する、もう一つの大作を世に送り出しました。

この本の起源の物語は面白い。1991年にウィルバーは性差に関する短い記事を発表し、ある女性から批判的な手紙が届いた。ウィルバーはそれに対して編集者に手紙を書き始めた。それがきっかけで堰き止められた考

えが一気に噴出した。4年後、フェミニズムに関する本を300冊以上、エコロジーに関する本を300冊以上、人類学、進化論、哲学などさまざまなテーマの本を400冊以上読んだ後、ウィルバーは『セックス、エコロジー、スピリチュアリティ：進化の精神』を出版した。これは800ページに及ぶ大作で、計画されている全3巻シリーズの第1巻である。ウィルバーが記事を書き始めるとしたら、神に助けてもらいたいものだ。

この本の目的は、物理的、生物学的、そして人間的進化を追跡し、それを永遠の哲学、つまり偉大な宗教的伝統の中心にある共通の知恵の核心の文脈の中に位置づけることです。

この作品の範囲は並外れています。東洋のオーロピンドや西洋のヘーゲルなど、これほど広大な進化のビジョンをまとめ上げた思想家はほんの一握りしかいません。しかし、ウィルバーの見解は、そのビジョンを宇宙論、生物学、人類学、社会学、心理学、哲学、生態学などの分野の現代研究に根付かせている点で独特です。

この広大な範囲と学識には、ある程度の代償が伴います。控えめに言っても、セックス、エコロジー、スピリチュアリティは、凡人には気が遠くなるような内容です。さらに、その範囲の広さゆえに、全体像を把握し、維持することが困難です。これは、この本が難解だったり、書き方が下手だからではありません。逆に、アイデアの豊富さと斬新さを考えると、文章は驚くほど滑らかで明快です。むしろ、斬新なアイデアがあまりにも多いため、本の冒頭にあるアイデアが記憶から追いやられてしまう傾向があることが問題です。

したがって、この記事の主な目的は、ゲシュタルトやビジョンの感覚を与え、より簡単に記憶に残る読書を可能にする枠組みを提供する概要を提供することです。したがって、これは詳細な批評的レビューというよりも、概要です。

この本はあまりにも多くのテーマを扱っており、おそらく一人の人間がそれらすべてについて十分な知識に基づいた批評をすることは不可能でしょう。この本は今後数十年にわたって、各分野の専門家による専門的な批評のテーマとなるでしょう。したがって、以下は、数多くの興味深い派生を除いた中心となるテーマです。

## 私たちの分裂した世界観

ウィルバーは、まず私たちの生態学的危機に注目することから始めます。生態学的運動では、これらの危機は、破滅的に分裂した世界観を反映していると想定されるのが一般的です。その世界観は、二元論的、機械論的、原子論的、人間中心主義的、家父長制的、病的な階層主義的であると非難されることが多く、人間を自然から、精神を身体から、そして魂をあらゆるものから切り離す世界観です。その結果、ディープ エコロジーやエコフェミニズムなどの運動は、より全体論的、統合的、関係的であると言われる新しい世界観を提唱しています。

ウィルバーは、この断片的な世界観の科学的起源を、19世紀に「時間の2本の矢」が初めて認識されたときに探究しています。逆説的に、熱力学の第二法則によれば、物理的宇宙はエントロピーが増大する方向に進んでいるように見えるのに対し、進化の発見により、生命はより複雑で分化している（ネグエントロピー）ように見えることが示されました。したがって、物理圏と生物圏、つまり物理科学と生物科学は、取り返しのつかない

いほどに分離しているように見え、統合に向けたさまざまな理論的試み（たとえば、唯物論的還元主義、現象論、随伴現象論）があったものの、どれも完全に満足できるものではありませんでした。

20世紀後半になってようやく、物質にはより大きな秩序と複雑さを生み出す可能性があることが発見され、科学はようやく再統一の確固たる基盤を提示しました。たとえば、ノーベル賞受賞化学者イリヤ・プリゴジンが発見したように、「散逸構造」と呼ばれる特定の生化学システムは、エントロピーと熱力学の第二法則に明らかに反して、化学的複雑さを増すことができます。この反抗は、生命の起源の可能性のある基盤を提供すると考えられています。

この再統合から、一般システム理論、サイバネティクス、非平衡熱力学システム理論、進化システム理論など、複雑性のさまざまなシステム科学が生まれました。進化システム理論など、これらの中には、物理的、生物学的、および知覚的領域全体で同様のプロセスと進化のパターンを特定できると具体的に主張するものもあります。重要な点は、物質、生命、精神における自己組織化、自己超越のプロセスに関する重要な科学的証拠が現在あることです。

ウィルバーは、理論の展開を進める前に、彼の理論と他の多くの進化論研究者の理論の中心となる階層の概念を復活させる必要がある。階層は一部の境界ではやや汚い言葉になっており、批評家は、すべての階層は、抑圧、疎外、破壊をもたらすランキングや支配を必要とすると主張する。階層をすべて廃止する必要があるという意見は珍しくない。しかし、ウィルバーが指摘するように、これは不可能だけでなく、哲学者がパフォーマンス的矛盾と呼ぶものの一例でもある。なぜなら、階層よりも非階層を好むこと自体が、階層的な価値判断だからである。質的な区別は、人間の経験の避けられない一部である。

さらに、システム科学では、階層は統合、全体性、システムの機能に不可欠であると主張しています。この文脈で理解すると、階層とは単に現象をその全体的な能力に従ってランク付けすることです。したがって、必ずしも価値の階層、支配、抑圧を伴うわけではありません。

階層の概念、あるいは彼が好んで呼ぶホラルキー（アーサー・ケストラーの用語を採用）を復活させたウィルバーは、次に、物理的、生物学的、精神的という3つの大きな領域にわたるシステムと現象に当てはまる共通の原理とプロセスに目を向けます。ウィルバーにとって、基本的なカテゴリはホロンです。これはケストラーが導入した用語で、宇宙のあらゆる実体と現象は、単に全体でも部分でもなく、同時に両方であることを意味します。

ウィルバーは、階層とホロンの概念を使って、さまざまな階層の性質とその誤用を明確にしています。たとえば、エコロジーとエコフェミニズムの一般的なシステム理論のほとんどは、ある種の生命の網である存在のホラルキーに基づいています。人間は通常、生物圏またはガイアの1つの糸または一部としてこの網に組み込まれます。一看すると、この動きは非常に整然としていて、有機的で平等主義的に見えます。

しかし、この本の中でおそらく最も知的に挑戦的な部分で、ウィルバーは物事はそれほど単純ではないことを示しています。階層的に秩序付けられた構造と創発物（階層の特定のレベルで新たに出現する特性または能

力)は、単純に低次の現象の観点から解釈することも、低次の現象の一部として考えることもできません。たとえば、水素原子と酸素原子が結合すると、湿り気などの新しい創発特性を持つ水分子が生成されます。これらの創発特性は、その構成原子の特性からはまったく予測できず、原子の観点から説明することはできません。そしてもちろん、水分子は原子の中に含まれていません。

同様に、生命、つまり生物圏は、単に純粋物質の領域である物理圏に含まれたり、物理圏に還元されたり、物理圏で説明されたりするものではありません。生命には、その化学成分の特性には見られない、新たな特性があります。言い換えれば、生命には、単なる分子の動きで説明できないような特性と能力があります。同様に、ノウアスフィア(知覚力のある生命の領域)は、単に生物圏から出現し、生物圏の中にあるわけではありません。つまり、ノウアスフィアは、生物圏と呼ばれるより大きな全体の構成要素ではなく、ある意味でそれを超越する新たなものです。したがって、存在論的には、ノウアスフィアは、生物圏の単なる一部分に還元したり、単に一部分として考えたりすることはできません。そして、人間は、3つの「圏」またはレベルすべてから構成される複合的な個人であり、物理的レベルと生物学的レベルのみで構成される生物圏の一部分として単純に考えることはできません。

これは難しいが重要な議論であり、ここでは簡単に説明するにとどめます。この議論は、人間を含む一部の生命形態に他の生命形態よりも高い価値を与えながら、同時にすべての生命を尊重する方法など、生態学的思考を悩ませてきた多くの謎を解くものと思われます。ウィルバーは、この考え方は一見反生態学的であるように思われるかもしれないが、そうではないと長々と論じています。むしろ、この考え方は、今では自分自身の複合的な個性の一部として認識されている生命と環境に対する関心を高めることに自然に繋がると主張しています。

#### 4つの象限

これまで検討したスキームと階層はすべて、一般システム理論が経験的であることを目指しているため、外部のみを扱っています。したがって、内部性や主観性はほぼ完全に無視されています。システム理論は、本質的には表面または外部の理論です。

内部、つまり主観、経験、意識を理解するには、共感、内省、解釈という別のアプローチが必要です。要するに、システム理論は、システムと進化について非常に貴重ではあるが非常に部分的な見方を与えてくれました。それ自体は悪いことではありません。しかし、システム科学者が、あまりにも多くの科学者がそうであるように、現実のすべての領域をマッピングしている、または少なくともマッピングできると主張すると、大きな問題が生じます。

ウィルバーはこの見解を拡張しようとしています。彼は、包括的なアプローチには、個人のホロンの外部行動だけでなく、社会やグループのホロン、さらには個人とグループの両方の内面または主観性に関する客観的な研究も含める必要があると主張しています。そこで彼は、個人と社会のホロンをそれぞれ上半分と下半分に、外部と内部をそれぞれ右半分と左半分に置いた「4象限」モデルと呼ばれるものを導入しています。

還元主義は、すべてのホロンが実際に左手と右手の象限の両方を持ち、経験的データが非常に明白であるため、合理的に思えるかもしれませんが。しかし、どの象限も他の象限に完全に還元できるわけではなく、粗大な還元主義も微細な還元主義も破壊的になり得ます。これは、たとえばシステム理論家の場合、陰険な場合があります。なぜなら、これらの人々は、すべての現実を本当に総合的に受け入れていると信じており、彼らの世界観からどれほど多くの、そしてどれほどの価値が失われているかにまったく気づいていないように見えるからです。

この段階で、ウィルバーは、発達と進化、特に人類の進化を4つの象限すべてにわたって追跡するための概念的な基礎を築きました。彼はこれを進めます。

## 人類の進化

ウィルバーは、ジャン・ピアジェなどの認知発達心理学者が考案した地図を使って、個人の心理的発達を追跡し、それを初期の人類から現代社会に至るまでの社会的、文化的進化に結び付けています。ウィルバーは、歴史を通じて個人の認知と文化の展開の両方が進化してきたと主張しています。進化と歴史の各時代は、相関する社会的に共有された世界観や道徳とともに、個人の認知発達の特定の段階と関連しています。

一般的な考え方は、文化の進化と個人の発達は密接に関係しているということです。社会は個人の発達を通常のレベルまで促進し、それを超える発達を妨げる傾向があり、個人の期待される心理的発達と文化の「発達の重心」の間には比較的密接な相関関係があります。

ウィルバーは、各歴史的段階におけるジェンダー関係の進化と環境に対する人間の関係に特に注目している。特に、彼は、フェミニスト研究の重要な一群を引用して、一般的な想定に反して、歴史的に女性に生じた不平等は、男性の支配と抑圧だけに起因するものではないと指摘している。むしろ、それは、力の差などの生物学的要因、道具の種類や食料獲得方法などの経済的生産的要因、平等が顕著な特徴や道徳的義務ではなかった発達段階や世界観にも部分的に起因している。これにより、彼は、解放運動の出現を、合理性の出現（および進化の単なる生物学的決定要因からの解放）の部分的な反映と見なし、以前のジェンダー不平等を、一部のフェミニストが暗示する男性の悪意と女性の「卑屈さ」以上の機能として解釈することができる。

また、現在男性に支配されている新しい情報技術が、非平等主義的かつジェンダーを分裂させる可能性について、彼はぞっとするような結論を導き出している。私は、女性解放は概して不可逆的な進化の原動力であると単純に考えていた。しかし、ウィルバーは、文化の技術経済的基盤が社会階層を決定する力を持っていることを指摘し、将来の技術が必ずしも平等を促進するという保証はないと主張している。これは、フェミニストがほとんど見落としてきた懸念である。

## トランスパーソナルな発達

ピアジェの「形式的操作」段階と合理的世界観は、従来の主流科学で広く認識されている個人および文化の最高レベルです。しかし、ウィルバーは、私たち一人ひとりに潜在するより高い段階と可能性の存在の証拠を指

摘しています。その最初の段階を彼は「ビジョン ロジック」と呼んでいます。これは、個々の概念間の複数の関係を同時に思い描くことができる一種のネットワーク ロジックです。もちろん、ウィルバーはここで一人ではありません。ブルナー、フラベル、アリエティ、ゲブサーなど、複数の発達研究者が同様の段階を示唆しています。しかし、プロティノスやインドの偉大な哲学者であり賢者でもあるオーロビンなどの瞑想家が提示した発達マップに同様の段階を認めている点で、ウィルバーは独特です。

ウィルバーにとって、ヴィジョン・ロジックの先には、彼が心霊的、微細、因果的、非二元的と呼ぶ、さらに4つの主要な段階があります。これらは超個人的段階であり、自己意識が個人的なものを超えて拡大し始め、アラン・ワッツが「皮膚に包まれた自我」と表現したように、人類、生命、内的小および外的宇宙、意識そのものの側面、さらには全体を包含するようになります。

ウィルバーは、心霊的、微細的、因果的、非二元の段階を、自然、神、無形、非二元の4種類の神秘主義と関連付け、それぞれの例としてラルフ・ワルド・エマーソン、聖テレサ、マイスター・エックハルト、ラマナ・マハリシを挙げています。

「超能力者」という言葉は、意味的に多くの負担を伴い、不幸な言葉の選択のように思われます。しかし、ウィルバーが使用するこの言葉は、ESP やその他の超能力現象とはまったく関係がありません。むしろ、クンダリーニ エネルギーや自然の神性などの経験がまだ主に身体に基づいている、初期の超人的な段階を指します。

微細なレベルが出現する頃には、経験はより内面的なものとなり、光と音の微細な経験（シャブドヨガとナドヨガ）や、シャーマンのパワーアニマル、ヒンズー教のイシュタデーヴァ、キリスト教の瞑想者の聖なる人物などの原型的なイメージに関わるようになります。因果レベルでは、仏教の涅槃、ヴェーダーンタのニルヴィカルパサマーディ、グノーシスの深淵など、すべての形態と経験が消え去り、純粋な意識だけが残ります。最後に、非二元性の頂点に達すると、現象が再び現れますが、それは即座に、自発的に、意識の投影、表現、または顕現として認識され、意識以外の何物でもありません。これがヒンズー教のサハジサマーディであり、禅の「形は空なり」です。

これまでウィルバーは、初期のヒューマノイドからポストモダニズムまでの進化、幼児期から非二元性までの個人の発達をたどり、これらを世界観、道徳、アイデンティティ、ジェンダー関係、生態系関係など、多数の関連現象の発達の/進化的プロファイルと相関させてきました。明らかに、本を読み終えてビールを飲む時間になったようです。しかし、そうではありません。ウィルバーにとって、これは本の第1部であり、全体像の半分にすぎません。つまり、上昇する半分、つまり「上昇の道」です。第2部では、別の動き、「下降の道」をたどります。そして、これら2つの分離こそが、西洋の二元論の中で最も基本的なものの1つであるとウィルバーは主張しています。

上昇と下降

ウィルバーにとって、上昇と下降の道を統合した西洋の哲学賢人の2人の模範は、プラトンとプロティノスです。たとえば、プラトンは『国家』と『饗宴』で「善」への上昇の道筋を示しています。この観点からすると、プラトンの善とは、因果領域の直接的な神秘体験です。つまり、性質や顕現を超えた、したがって超理性的で超言語的なものであり、その外側にある物質世界は単なる影の洞窟です。これは、因果レベルへの上昇の古典的な説明であり、おそらく古典的な西洋の説明です。そして、この上昇と世界からの脱出は、西洋の典型的な目標となりました。

多くの批評家は、プラトンは上昇者でしかなかったと想定しています。しかし、もっと注意深く読むと、プラトンは上昇と下降の両方の道筋を描いていることがわかります。善に上昇した後、彼は進路を逆転させます。今や世界は超越的なものの表現または具体化、そしてまさにその完成である「目に見える感覚的な神」と見なされています。善の自己充足的な完全性は、自己投影し、自己を空にする豊穡でもあります。したがって、善は人生の頂点と目標であるだけでなく、世界と共存する世界の源泉と基盤でもあります。そして、源泉は顕現によって「より完全」になります。したがって、プラトンは上昇と下降を、東西両方に見られる古典的な非二元的な立場に統合し、ウィルバーはそれを次のように要約しています。

多数から逃げ、一つを見つけ、

多数を一つとして受け入れる

東洋では、世界から自分自身を解き放ち、一を悟ることは知恵と同じである。その後、降りて戻って多を受け入れることは慈悲と同じであり、上昇と下降の統合は「知恵と慈悲の融合」である。

この非二元的な観点からすると、世界と肉体は悪でも墮落したものでもありません。しかし、それらに魅了され、つまりマヤ、幻想に囚われ、心理学者チャールズ・タルトがコンセンサス・トランスと呼ぶものに囚われ、それによって超越的領域とそれとの一体性に対する認識を失うことは悲惨なことです。いったん失った後は、「魂の目」（プラトン）、「心の目」（スーフィズム）、「道の目」（道教）を開く「回想」の訓練を通じて、この認識を取り戻すことが課題となります。目標は、私たちの真の超越的性質を認識する幻想を打ち砕く知恵であり、ヒンズー教のジュニャーナ、仏教のプラジュニャ、イスラム教のマリファ、時にはキリスト教のグノーシスとして知られています。

上昇と下降のプラトンの統合はプロティノスによって継承され、聖アウグスティヌスによれば、彼の中に「プラトンが再び生きた」。彼は多様な伝統を引用し、自身の神秘的な経験に基づいた広大な総合的なビジョンを創造した。彼の見解は、宇宙を物質からさまざまな微妙な精神領域を経て純粋な意識または精神の領域まで広がる広大な存在の階層として見る、存在の大いなる連鎖の最初の包括的なバージョンであった。

ウィルバーが明らかにしているように、重要なのは、プラトンやプロティノス、そしてオーロピンドのような東洋の哲学賢者たちの体系が、本来は哲学や形而上学ではないということである。むしろ、それらは、必要な段階まで発達した人々に生じる、直接再現可能な現象学的理解の記述である。しかし、それらはあまりにも頻繁に「単なる形而上学」として解釈されてきた。

プラトン、プロティノス、オーロピンドにとって、発達の上昇の過程では、各段階が下位の段階を包含または包み込む。プラトンによれば、上昇のプロセスはエロス、つまりより大きな結合を求める衝動によって推進される。補足的に、プロティノスにとって、上昇の各段階では、エロスがアガペー（愛と恋人への配慮）とバランスが取れるように、下位の段階を受け入れなければならない。ギリシャ人が最初に呼んだように、上昇する愛の流れと下降する愛の流れが織り交ぜられた多次元コスモスのビジョンは、その後のすべての新プラトン派の中心テーマとなり、啓蒙主義を超えて思想に多大な影響を及ぼすことになる。

しかし、ウィルバーによれば、エロスとアガペーは両方とも、理想的には原因となる一者の直接的な経験によって個人の中に統合されていない場合には、道を誤る可能性がある。

ウィルバーは、偉大なジークムント・フロイトがエロスとアガペーの分離の典型例であると示唆しています。フロイト自身は最終的に、エロスとタナトスという2つの衝動を仮定し、エロスの目的は「統一を確立すること」であると示唆しました。フロイトにとって、人間の多くの悲惨さは上昇と下降の力の間の闘争または衝突から生じます。しかし、フロイトは上昇を一者との統一における超個人的結論にまで持ち込みませんでした。実際、彼はそのような試みを神経症的未熟さとして軽蔑し、病理化しました。そのため、超個人的進歩と前個人的退行が混同され、ウィルバーはこれを「前/超の誤謬」と呼んでいます。したがって、彼は人間の可能性について断片的なビジョンを与え、人類に対する彼の予測は永遠の闘争でした。

従来のレベルを超えて超人的な段階に至る発達を誤解したり、病理化したりすることは、西洋の悲劇的な典型です。東洋の多くの地域では、因果的および非二元的な認識が心理的・精神的発達の頂点として認識され、認められていました。ナーガールジュナやシャンカラなどの賢者は、これらの認識をそれぞれ中観仏教とアドヴァイタ・ヴェーダーンタという高度に洗練された哲学に発展させ、神話的解釈と共存し、調和させました。したがって、個人は、自分の興味、能力、発達に応じて、哲学または神話のいずれか、または両方からインスピレーションを得ることができました。しかし、西洋では、神話レベルのキリスト教が「教会」として制度化され、支配的になり、教会は、自身の神話レベルの解釈のみを真実と宣言し、より高度な超合理的解釈は冒瀆的であると宣言しました。

これは、自分より上の段階は誤解され、病理化され、脅威とみなされる傾向があるという一般原則の具体的な例です。ウィルバーはキリスト教に焦点を当てていますが、神秘主義に対する同様の混乱と相反する感情は、歴史文書に最終的な権威を固定し、新しい神秘的な洞察の突破口を恥ずかしがる他の伝統の特徴のようです。したがって、ユダヤ教は何世紀にもわたってその神秘的な側面をほとんど軽視してきましたが、伝統的なイスラム教とその神秘的なスーフィズムの間には長い間緊張関係がありました。

現在、これらの伝統のそれぞれにおいて、瞑想の実践と知恵を再活性化する取り組みが活発化しています。しかし、この再活性化は、西洋で覚醒の可能性が事実上遮断された千年紀の終わりに行われ、今日に至るまで、西洋文化では神秘主義が広く誤解されたままです。

もちろん、超越への衝動を完全に抑えることはできませんでした。時折、聖アウグスティヌス、マイスター・エックハルト、ジュリアン女史、聖テレサ、ラインラントの神秘主義者など、制度的障壁を克服して超越を実

現した素晴らしい人物が現れ、それによって、慣習的な神話と慣習を超えた実現を調和させるという困難で危険な課題に自分自身と教会が直面しました。しかし、そのような神秘主義者の深い洞察にもかかわらず、16世紀と17世紀に近代化と経験的科学的見解が台頭するまで、慣習的な神話（たとえば教会の教義）の力が主に支配していました。

## エゴとエコの視点

ウィルバーにとって、近代は、この時代の良いニュースと悪いニュースを表す2つの大きな傾向によって特徴づけられる。近代の観点から見た良いニュースは、神話が合理性によって置き換えられ、経験的証拠が求められるようになったことである。悪いニュースは、同意が神話と同一視され、「神話はもうたくさんだ」という叫びが、事実上「上昇はもうたくさんだ」となったことである。

発展的上昇の可能性が否定されたことで、注意は下の世界へと向けられ、上方の無限ではなく、前方に水平の無限が広がっていました。宇宙はもはや存在の多次元的大局として見られることはなくなりました。むしろ、それは「存在論的平地」、つまり、単に経験的（右手）アプローチによってのみ調査されるべき、連動する偉大な秩序となりました。このように左手の内部象限を無視し、現象を右手の外的次元のみに還元することは、ウィルバーが微妙な還元主義と呼ぶものです。左手象限がなくなると、価値、意味、目的などの主観的現象の根拠と妥当性も失われます。その結果、不毛で意味のない平地が生まれ、それは「神聖さを失った」、「失格した」、「魔法がかけられた」世界とも表現されています。

この世界観は哲学者に、いわゆる近代の中心問題、すなわち人間の主観性と世界との関係という問題を提示した。理性的な自我は、自分は偉大な生命の網の中の一本の糸に過ぎないと言いかもしれないが、それは主観的なものを経験的なものに還元し、左の象限を右の象限に還元した。今や、よい人生という問題は、自然の野蛮な衝動とは別に、理性的な自我が自らの道徳と願望を生み出す自律的な行為を求めるか、あるいは、生命的、官能的、性的要素を含む自然とつながり、交わることで自然界との交わりを求めるか、というものである。ウィルバーはこの緊張を、自我陣営とエコ陣営の対立と呼んでいる。

イマヌエル・カントは自我派の典型です。彼にとって、理性的な自我、つまり道徳的な主体は、自己中心的な欲望や社会的に低い勢力の束縛から解放され、実質的に自立する程度までしか自由ではありません。こうして啓蒙主義パラダイムの主観的部分、いわゆる自己定義主体、自律的自我、解放された自己、主体の哲学、あるいは自足的な主体性が生まれました。

自我陣営のより粗雑な形態の問題は、表面に焦点を当て、内面性を無視し、意味、価値、目的の次元を避ける、知識の右側の経験的表現を過度に強調していることでした。

一方、エコ キャンプは、この知識のパラダイムによって、主体が異質で単色の世界から切り離されてしまったと、極めて当然の考えを持っていました。そのため、エコ キャンプは、人間存在の「生きた源」に再び触れ、再生できるよう、自然への回帰を主張しました。その結果、適切な認識の方法は、利害関係のない思考で

はなく、力強い感情であると考えられ、自然との関わりを深め、表現するための最良の手段は、詩と芸術であると考えられました。

エコ陣営にとっての問題は、理性の恩恵を失うことなく、いかにして自己を生命の流れの中に取り戻すかということだった。このことは、これらの思想家が分化と分離を混同する傾向があったため、特に問題となった。したがって、自己と世界の前理性的な融合の発達のおよび進化的分化は、その後のより高次の統合を可能にする必要な発達段階ではなく、むしろ失われた楽園につながる病的なプロセスと見なされた。

すべての物事と同様に、自我プロジェクトとエコプロジェクトは、最終的には自らの限界の重圧に押しつぶされてしまいました。理性的な自我派は、自己中心的な動機、自然な衝動、慣習的な社会支配からの自由を求めました。しかし、そうすることで、超個人的経験や、生命力、肉体、官能性といった個人以前の領域を含む他の価値を疎外し、抑圧し、分離させることがよくありました。

しかし、エコ派は、過度の客観性、自律性、道具性からの自由を求めた。しかし、結局は感情的かつ非合理的な衝動を過大評価し、プラトンやプロティノスが考えていたように自然を精神の具現化としてではなく、感情の源として見なすようになった。

## 進化の精神

絶対的な主体と絶対的な客体として表現される自我とエコの対立は、19世紀初頭の大きな知的プロジェクトでした。ウィルバーにとって、この対立の解決はフリードリヒ シェリングの哲学によってもたらされました。シェリングにとって、啓蒙主義は精神と自然を区別しましたが、両者の超越的な基盤をほとんど忘れていました。したがって、シェリングにとって、自然は客観的な精神であり、精神は主観的な精神です。自我とエコの陣営がそうする傾向があったように、これら2つは完全に無関係であると思なされることがあります。しかし、これら2つの「見かけ上の絶対」は、精神の3番目の偉大な運動で統合されます。

シェリングとヘーゲルの両者によれば、精神は3つの主要な段階を経る。精神はまず客観的な進化する自然として発散または顕現する。次に主観的な精神の中で自らに目覚め、最後に主観と客観、精神と自然が統合された非二元的な意識の中で本来のアイデンティティを取り戻す。これらの観念論者は非二元とその顕現と意味の一部を真に垣間見ることができたようだ。しかし、シェリングとヘーゲルのドイツ観念論は、その創始者よりわずかに長く生き残った。彼らの死後まもなく、それは論理的かつ哲学的な理由から「単なる形而上学」として退けられた。

しかし、ウィルバーは、その失敗は純粹に哲学的な原因よりもむしろ実際的な原因によるのではないかと示唆しています。彼は、自発的な一瞥を得ることと、持続的なビジョンを確保すること、さらには意志で重要な一瞥を得ることの間には大きな違いがあることを強調しています。多くの瞑想の伝統では、2つの異なる課題について語っています。1つ目は、最初の一時的な突破口となる一瞥（「ピーク」体験）を得ること、2つ目は、この一瞥を意志で再現し、永続的なビジョンとして安定させることです。課題は、自発的な体験を自発的

な体験にすること、ピーク体験をプラトニズムにまで拡張すること、または宗教学者のヒューストン スミスが雄弁に述べたように、「閃光を永続的な光に変える」ことです。

この変容には厳格で本物の瞑想の訓練が必要ですが、ドイツの観念論者にはそれがありませんでした。その結果、彼らは、他の探検家が彼らの洞察を再現できる手段を提供できず、その洞察はほぼ反証不可能でした。対照的に、シャンカラやヨーガカールム教徒などのアジアの観念論者は、実践者が非二元性の経験を垣間見て安定させることができる超越の芸術と、そこから生じる洞察を明確に表現するために何世紀にもわたって存続してきた観念論的哲学の両方を提供しました。

ダーウィンの理論は、ドイツ観念論者の進化観にも萎縮効果を及ぼしました。自然淘汰により、科学は自然界におけるあらゆるエロスや超越的/創発的衝動を否定することができました。最近では、この否定が疑問視されています。なぜなら、ダーウィンの自然淘汰はミクロ進化を説明できるかもしれませんが、マクロ進化、つまり目や機能的な羽の出現などの大きな進化の飛躍や突破口を説明できないことが明らかになったからです。

さらに、ビッグバンの驚くべき研究により、知識はプランク定数によって規定される絶対的な時間的限界、つまり1秒の1043分の1まで遡りつつあります。これらの発見は、物理法則が考えられる最も古い瞬間から機能していたことを示しています。唯物論的な説明ではこれを説明するのは非常に困難であり、ビッグバンは多くの思慮深い人々を哲学的理想主義者に変えました。これらすべてを考慮すると、ウィルバーが適切な理想主義の創造を現代西洋にとっての重要な課題の1つと見なすのも不思議ではありません。

これらの宇宙論的および進化論的発見の最終的な結果として、多くの科学哲学者が進化におけるある種の自己超越的衝動を認めるようになった。ダーウィン理論の大きな影響の1つは、大進化のメカニズムを発見したことではなく（発見しなかった）、むしろ、本物の進化理論は宇宙におけるエロスに似た何らかの自己超越的衝動を認めなければならないという認識を長い間あいまいにしてきたことである。

ウィルバーは、この自己超越の衝動が、ますます多くの人々を、従来の合理性の発達レベルを超えて、超合理性、超個人的な段階へと移行させ始めていると示唆しています。彼は、このプロセスの進化は、超個人的な段階のこれらの直観を解き明かす感度の程度によって促進されるか、または妨げられる可能性があるかと主張しています。すべての内面性と主観性は解釈されなければならないが、この解釈の質はその内面性の連続的な深みの誕生にとって極めて重要です。この解き明かしと解釈が陥りやすい誤りの種類は、4つの象限のどれを強調するか、または過度に強調するかによって分類できます。

多くの人々は、高次の段階の経験を純粋に左上象限（個人的、主観的）の観点で直感します。この解釈は、「高次の自己」や「純粋な認識」などの主観的現象に焦点を当てており、左下象限と右両象限、つまり文化的、社会的、およびすべての客観的な現れを省略しています。これにより、高次の段階に求められる適切な種類のコミュニティ活動とサービス、およびそれらをサポートするのに必要な適切な技術経済的インフラストラクチャが考慮から実質的に除外されます。

特に残念な結果となるのは、より高い段階の悟りによって世界に対する関心から解放されるという思い込みです。対照的に、より深い洞察と理解は、より高い発展には必然的に世界を受け入れ、奉仕することが必要であり、もはや世界は自己とは別物ではないことを明確に示しています。したがって、課題は単により高い自己と接触することではなく、それが「文化に受け入れられ、自然に具現され、社会制度に埋め込まれている」と見なすことです。

一方、高次の段階の直感を主に客観的な言葉で解釈し、精神をすべての現象の総体、または偉大な網として説明する人もいます。この右利きのシステムの解釈は、左手の象限の「私」と「私たち」の次元を無視する傾向のある、下降した平地の世界観をもたらします。その結果、この見解はすべての生命の抱擁を促しますが、この抱擁に不可欠な内部変革の程度を理解していないことが多く、善との結合と「生きている賢明な神」としての世界の認識に必要な変革は言うまでもありません。不幸な結果は、精神を洞窟内の影の総体と混同する下降した世界観です。

したがってケン・ウィルバーにとって、さらなる個人の発展、文化の統合、環境の保全、そして私たちの本質の認識には、超人的な段階への発展の可能性を理解し、それを実現するための実践を行い、それを表現するために4つの象限すべてを使用することが必要です。そのような包括的なビジョンによってのみ、進化の精神は私たちの中で、そして私たちを通して実現できると彼は言います。間違いなく修正され、洗練されるでしょうが、ウィルバーのビジョンはこのプロセスに大きく貢献しているようです。

## 注釈と参考文献

1. K.ウィルバー『意識のスペクトル』（クエスト、1977年）。
2. K.ウィルバー『アートマン・プロジェクト』（クエスト、1980年）。
3. K. ウィルバー『エデンからの解放：人類進化のトランスパーソナルな見方』（ダブルデイ、1981年）。
4. K. ウィルバー著『社会的な神』（マグロウヒル、1983年）。K. ウィルバー著『Eye to Eye: The Quest for the New Paradigm』（アンカー ダブルデイ、1983年）；K. ウィルバー著『Quantum Questions: Mystical Writings of the World's Great Physicists』（シャンバラ、1984年）；D. アンソニー、B. エッカー、K. ウィルバー（編著）『Spiritual Choices』（パラゴンハウス、1987年）；K. ウィルバー、J. エングラー、D. ブラウン（編著）『Transformations of Consciousness』（ヴァン ノストランド ラインホールド、1986年）。
5. K.ウィルバー『グレースとグリット』（シャンバラ、1991年）。
6. 階層構造に対する現代の批判とそれに対する対応に関する優れた議論については、D. Rothberg 著「トランスパーソナル心理学の哲学的基礎：いくつかの基本的問題への入門」『トランスパーソナル心理学ジャーナル』18(1986):1-34 を参照。

トップ

家

議論

進化

認知科学

コミュニケーション

談話

文化

文献

カリフォルニア大学ロサンゼルス校コミュニケーション学部のフランシス・F・ステーションが管理

コグウェブ